

インポッシブル・ギャグ

登場人物

ミチコ	王妃／不笑／重ね着
ロバ	ガイド／未笑／侍従／蹄
ポー	カップル／微笑／放言／赤
ラーラ	カップル／爆笑／狂言／黄
たけし	脱法芸人／寒笑／慰問／スーツ
きよし	合法ヤクザ／暖笑／民衆／裸足

事が起こると物語がすり寄ってきてボクシングが発生する。

事が生じた人体に好きなきに好きなシーンが勝手に再生され、再生されるたびに別の誰かの視点が加わっているよう誰かに祈られつつ、すべての事が同時に発生する。

さびれたロビーに一枚の大きな壁が複数人の手で運び込まれる。

裏側は見えない。

どこからともなく子どもらがその壁の前に集まってくる。

壁に四方から光が射しこんでくる。壁の表面に、人物たちが、つづいて背景が浮かび上がってくる。子どもらはそれを見ている。その光景を見たり見なかったりする人たちがいる。

人物たちのアクションは、壁の前にいる子どもらが笑ったり真似したり飛んだり走ったり動いたりするそのリアクションに捧げられている。しかしながら人物たちのほうから子どもらのそれを見ることはできず、人物たちは風や湿度、音声、皮膚、数々の玩具といった媒質からリアクションの感触を得る。

できればこっちにきてほしいし、あっちにいきたいという傾きを持っている。

光のなかから浮かび上がってきたのは、オアフ島が日本武道館内にぎゅつと濃縮還元されたような場です。

人・物たちが、ぞくぞくと現れてきます。

ポーはラーラと久々の再会。にかにか笑っています。

宙空から紅白のロープが垂れ、紅いロープにはたけしが、白いロープにはきよし
がへの字に吊るされています。きよしの口からはよだれが、たけしの頭からは汗
が、地面に垂れてしみをつくり、そのそばをロバが悠々とリズムカルに通り過ぎ
ていきます。そのロバと散歩しているミチコは吊られた人体を一瞥して昔の戦い
のことを思いだしているようです。ロバは何かを思いだしているミチコをみて何
かを思いだそうとするも何も思いだせません。

他愛なく此岸から

ラーラ ひどい時代だね。

ポー 花粉、年々きつくなってるもんね。

ラーラ ほんと、ひどい時代。

たけし 助けてくれ。

ポー わたしは時代のせいにはしないかな。ウインナーコーヒーで。

ラーラ わたしレモネード。時代、気休めにもなんないもんね。

きよし ありがとうございます。

ポー 責任概念なくなっちゃうとね、何かのせいにするのも難しいよね。

ラーラ それ逆にぜんぶ何かのせいにできちゃうんじゃないの。

ポー あ、たしかに、かもね、神を疑わず不運を神のせいにしなけりや自分だけは神に守られちゃうもんね。

ラーラ そんな信心深いひとがぜんぶ何かのせいにするかなー

ポー 信心深くないひとたちがいるからね、すると思う。

たけし 助けてください！

ラーラ ずっとそうやってきたんだね。

ポー うん、ずうっと、そうやってきた。やっぱ、もうやめる。

ラーラ えらいえらい、十年前はくそくそ投げててもは？なにが？って具合だったけど、いまやうんうんわかるだもんね。

きよし ありがとうって伝えたくて！

ポー 天気の話より時代の話のほうがグローバルかもね。

ラーラ 三重と山形じゃ天気は違うけど、時代は同じだもんね。

ポー 三重と山形はチョイス渋すぎ、そのふたつ並べたことない。

ラーラ 意外と並べたことないものって多いよね、シブがき隊とピーチ姫とか、ラムネと胸肉とか……

ラーラ うける。

たけし ありがとう！

きよし たすけてくれて！

ポー でも、わたしら、ほんとに同時代？ にいる？

ラーラ 五歳児と高二と三十五歳と八十が同時代にいるかっていわれると難しい

ね。時間止まってる可能性もあるし進みすぎてる可能性もあるし、でもそれを調停するのが同時代？ 同じ空気吸っておしゃべりできたらそれもう

同時代？

ポー わたしはゴダールの全盛期にいたかったし、好きな映画ってそういうものだよね、その時代にわたしがプロジェクトXされてる、それを押し潰そう

とするのが同時代。

ラーラ 同時代のひととしか交際できないし結婚できないし出産もできないし全部拒絶もできないなんてね。そのキモチを救うのはフリーズした精子くんと卵子ちゃん？ きもすぎ。

ポー あーあ、コーヒーも飲みたくなくなっちゃった、けどタピオカウーロン茶氷なしは飲みたいかも、って脳が。

ラーラ 脳ってほんと駄々っ子もドン引きするぐらいわがまますぎ適度にお砂糖あげないと即バッド入るしあげたらあげたでゼロコンマ秒で調子乗ってかわいいこにトリップさせちゃうし、かと思ったら結局薬より自然とかしたり顔で悟ったふりしては前頭葉でアルコールとニコチンとカフェインと乱交しちゃうし、脳、死にたいと思ってるとしか思えない。

ポー しにたがる脳とところしたがる時代と、わたしたち、かあー

ラーラ うん、teka、waaa、見て見て！ レモネード飲まずに放置してたら氷が溶けてあふれちゃった。洪水！

ポー そんなのありえないから。

ラーラ でも氷溶けたらツバルが沈んじゃうんでしょ？

ポー あれはね、海の上に氷が乗っかってるからフロートでしょ、レモネードの氷はどっぷりレモネードに浸かってるから氷と水は同じ、あふれないの。

ラーラ 物理的にはね、でもあふれてるよ！

ポー 笑えた。

ラーラ よかったね。

ポー うん。そのままずっとあふれててくれないかな。

ラーラ 温泉みたいに？

ポー わたしらのおしゃべりみたいに。

ラーラ そうだね、おしゃべり、やまない雨みたいにいつまでもつづくと思ってたけど、案外すぐ終わっちゃうもんね。

ポー 物理だね。いや、時代か。

ラーラ ん、どっちも。終わらないのは、一挙手一投足の音速の一瞬だよ。

ラーラは靴を脱いでテーブルのうえに置く。

ポーはウインナーコーヒーのクリームを舐めきったあと上着を一枚ずつゆっくりと脱いでいく。

木陰のベンチで休んでいるミチコはふたりに目をやり、その奥にあるものを見つめる。ロバはたけしのまわりを旋回する。

たけし 助けてくれ。足を置かせてくれ。

ロバ 冗談じゃない。

きよし そう、冗談じゃないんだ、ほんとうに、助けてくれ。

ロバ 冗談じゃない。

たけし それしか言えないのか。

ロバ 冗談じゃない。

きよし 冗談じゃないよ！

ロバ おもしろくないんだ。

たけし おもしろくなかったら吊るされていいのか？

ロバ 吊るされた人間が助けてくれと叫んでいるのがおもしろいか。おもしろくないだろう。おもしろくないんだ。

たけし そういうお前はおもしろいのか。

ロバ わたしにもおもしろいも糞もない。

きよし おれたちはおもしろいぞ。

ロバ じゃあ笑わせてみてくれ。

たけし このロープほどけたらこれであなたの首締めるでしょ、馬みたいにやさしい目で見つめあってね、あなたの氣道が噛み砕かれた紙ストローみたいに

狭くなるでしょ、グラビアアイドルの水着みたいにきつつう皮膚に食い込んで写真といっしょに永遠に残るでしょ、目が猿にくわえられたピンポン玉みたいにゆるっと出てくるでしょ、息がしゅーっしゅーって威嚇する蛇になってその舌先が真綿みたいにまっしろになった心臓に触れるでしょ、そしたらきもちよくって死んじやうよ、あなた、きつと。

ロバは鼻で笑う

きよし はい、わろたわろた、ありがとありがと。

ロバはミチコの元へ戻る

たけし 殺伐が身に馴染んできたな。

きよし なんのバツだ、これは。

たけし もしかしたらバツじゃないのかもしれない、これは。

きよし いや、バツだろう。少なくとも○じゃない。

たけし ああ、てっきり罪の付け合わせのほうかと思ったよ。

きよし 罪深い存在だったな、おれたちは。

たけし 人間だろう。それは。

きよし 人間だものにのっかった結果おれたちが吊るされてるんだ。

たけし いや、自分から進んで吊るされた。それだけだよ。

きよし じゃあ助けてなんて言うなよ。

たけし 助けてください！ ってずっと叫んでみたかったんだ、この状況なら言えるだろう？ ずっと言ってみたかったしどうい立場がそれを言わせるのか考えてみたかったんだ。

きよし お前は真面目になるのが遅いんだよ、いつも。

たけし 目の前に誰かいると真面目になれない。
きよし かわいそうに。

えんえんとつづく

